

タイトル：2025年度 教育セミナー（第21回）

日時：2025年9月18日（木）～21日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階 大会議室（303）

「バーキッターニー『道ならし』の構造—アシュアリー派神学体系の思想史に向けて」  
岡田 祥寛（東京大学大学院）

七月ごろに、研究室の机に置いてあったフライヤーを見て本セミナーに興味を持った。しかし、AA研のサイトで過去の感想を見てみると、思想研究の発表はきわめて少ないようだった。悩んだ末に、思い切って参加することに決めたが、結果的に得られたものは大きかったと思う。最終日に「思想研究の人間が少なくて肩身が狭かった」と言うと、高松先生から「きみが自分の研究室で宣伝すればよいのではないか」と諭された。こうした場では少数派になりがちな分野を志す私であっても、多くの有益なコメントを頂けた。参加を迷っている、まだ見ぬ「マイナー」な研究を志す後輩に、少しでも参考になればと思い、とくに印象に残ったことを記しておきたい。

思想研究に従事する者は、その軸足をイスラム史に置くか、あるいは思想ないし哲学に置くかで、おおまかに二分されると思う。私は、後者に属するように見える研究の、「(西洋)哲学」の用語を大胆に用いて古典期カラムを調理するし方にあまり共感できず、思想家の遺したテキストから哲学的な含意を読み解くよりは彼がひとりの知識人としてどのような利害のなかでそれを書くに至ったのか考察するほうに魅力を感じていたため、最近では前者のほうに傾きつつあった。だから、発表後、最初にでた写本にかんする質問と、それに答えているさなかでの高松先生による急なツッコミは、私の、写本にさかのぼって調査しようとする意識の甘さを痛感させるものであった。イスラム史に軸足を置くならば、史学の方法を学んでおくべきだという、ごくまっとうな教訓を得たのである。

最後に飯塚先生からのコメントがあった。私の所属する研究室の大先輩である彼は、思想史研究において何を「変化」と捉えるかは研究者によって決まるため、研究をまとめるのがむづかしいといった話をされた。私のように、神学書の全体を検討の俎上に乗せる研究をしていれば、なおさらであろう。複数のテキストを読解し、時代がより新しいものから古いものを差し引いて得られた「変化」を記述するだけのお手軽な思想史に対する茫漠とした不満を抱いていた私に、研究の方法論をあらためて丁寧に考えるきっかけを与えてくれた。その他にも、多くの建設的な質問・アドバイスをいただいた。最終日終了後の打ち上げでは、専門領域からおおきく離れた私の発表を記憶にとどめておいてくれた数人の受講生が、ありがたい感想を伝えてくれた。恂に忝いことである。

多くの宿題が課されたセミナーであったが、同時に、多くの糧も与えられたと思う。あれほど多くの受講生がいたのに、今でも集合写真を見れば、全員の名前と専門、発表内容をすぐに思い出すことができる。今後、学会などで彼らに再び会い、たがいの成長を確か

めあえることを楽しみにしている。本セミナーを通じて多くを学ぶ機会を与えてくださった先生方には、心より感謝申し上げたい。